

140「Rayito」

“ライト”あるいは“ラジート”と読む、これは愛称である。

正式名は Antonio Rayo Gibo (アントニオ・ラージョ・ギボ)。

かなり前のことになるが、偶然 Youtube で彼の演奏するギターで、Taranta[タランタ]の falseta [ファルセータ]を聴いた。私が偶然見た動画は、彼のインタビューを編集したもので、最後にそのタランタのファルセータが演奏された。

「タランタ」はフラメンコの形式の一つで、スペイン・アンダルシア東部のアルメリア地方で生まれた曲調。アンダルシア東部は鉱山が多く、炭鉱で働く苦しみや、鉱山に葬り去られた鉱夫の嘆きを表した曲。半音階的な音の動きと不協和音の響きで、独特のほの暗い雰囲気をもつ。

「ファルセータ」は、カンテ (フラメンコの唄) の途中に出て来るメロディーで、ギター奏者の聴かせどころともいえるべきもの。彼のファルセータは、わずか1分ほどの短いものだったが、とても印象に残るメロディーでたちまちファンになった。

インタビューの会話はスペイン語だったが Rayito は日本人顔、彼はスペイン人の父と日本人の母の間に、1982年スペイン マドリードで生まれた。母は沖縄生まれでフラメンコの踊り手である。名前に Gibo が入っているのは母の姓が“宜保”ということだ。顔の様子から、多分当時10歳くらいだろう、まだ子供の面影が残っている。

幼い頃に父からギターの手ほどきを受け、すぐに周囲が驚くほどの腕前になった。人前でどんどん演奏するようになり、何度もテレビに出演している。小さな体に大きなギターを抱え、小さな手で、鬼才ギタリスト パコ・デルシアの曲を、驚くほどの速さ、正確さで弾いてしまう才能の持ち主である。

その才能ゆえに幼い頃にデビュー、4歳でコンサートを行い、11歳で国際コンクールに優勝、フラメンコギターのソリストとしてデビューアルバムを録音した。将来どんな凄いフラメンコ・ギタリストになるのだろうと思ったものである。

15歳でアメリカ マイアミに移住してからの情報は少ない。ギターを弾きながら、自ら歌うラテン系ポップスのアルバムを発表し、残念ながらフラメンコからは離れたようだ。

ギターばかりでなく歌もとてもいい。アメリカに渡ったのは、フラメンコの世界だけでなく、シンガー・ソングライターとしてさらに音楽の幅を広げ、自分の才能を活かそうとしたためだろう。

2000年頃からは、ラテン系ミュージシャンなどと共に次々とアルバムを発表、プロモーションビデオで、ギターを弾きながら歌



笑顔のインタビュー



父 (スペイン人) 母 (日本人)



フラメンコ界の大スターと共に
パコ・デルシア (右)
カマロン・デ・ラ・イスラ (左)

う姿が見られる。

その後、プロデューサーとしても活動を開始、スタジオを立ち上げラテン音楽界でソングライターやプロデューサーとして活躍している。

ギタリストとしての腕前は本物なので、多くのアルバムでギター奏者として、フラメンコ独特の奏法で技を披露している。



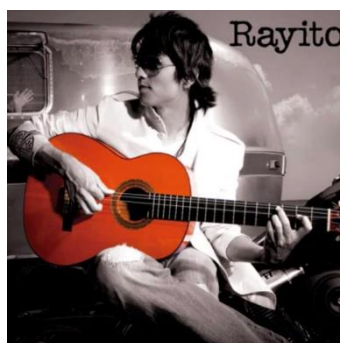
テレビ出演



アルバムジャケット



ラテンポップスのシンガーソングライターとして活躍



スタジオでの最近の姿

もし、そのままフラメンコ・ギタリストとして成長していれば、彼のオリジナル曲をソロで聴けたはずであり、私としてはとても残念な気持ちである。(2023.02.01)